

# 等価性の連続性について

—日本語とスロベニア語を中心に—

ロワン・バルバラ

キーワード：二言語辞書、デコーディング、等価性、連続性、prototype

## 1. はじめに

二つもしくはそれ以上の要素を比較し、それらの間の関係がイコールであるのかを調べる際に、等価性という概念が問題となる。等価性は対照言語学の中心的なテーマであると同時に、応用言語学における辞書学の二言語辞書に大きく関わるテーマである。

本稿では、二言語辞書における等価性および等価性の連続性について論ずる。具体的には、まず、比較をどのようなレベルで、また、どのような観点から行うかを決定する。次に、先行研究を概観し、等価性の連続性について考察する。最後に、等価性の連続性を日本語とスロベニア語の気象情報に使われている語彙において検討する。

## 2. 等価性について

### 2.1 単位と観点

二言語辞書において、見出し語として起点言語の語または語句が挙げられ、それに対応する目標言語で等価関係にある語あるいは語句が与えられる。このように、辞書の見出し語となるのは、「主として語あるいは一つのまとまった語彙レベルの意味を持つ表現に限られる」<sup>1</sup>ため、本稿で考察の対象となる単位は、語のレベルに限定する。ただし、一つの語とは何かということについては様々な見解があり<sup>2</sup>、また、一つの語と他の語との境界があまり明確ではないことも先行研究で指摘されているが<sup>3</sup>、それらの問題については取り上げない。

考察に当たって本稿では、二言語辞書を次の二つのポイントから分類する。第一に、その辞書がいかなる言語の話者を対象とするのか、第二に、使用者がその辞書を主に起点言語を理解（デコーディング）するために使うのか、あるいは目標言語で表現（エンコーディング）するために使うのか、という分類となる。デコーディングの辞書には、語から意味への方向転換が認められる。その場合に、使用者にとって起点言語の語の意味が未知であるが、一旦使用者がその意味を理解すると、目標言語でネイティブの能力を持っているため、目標言語の語がいかなる連語パターンを取るのかは問題にはならない。一方、エンコーディング辞書においては、意味から語への方向転換を示す辞書となる。つまり、使用者にとって、起点言語の語が既知であるが、目標言語

の語の使用パターンに関しては母語話者の能力を持っていないため、辞書ではそれに関して情報を提供する必要が生じる。

上述の二つのポイントに基づいて二言語辞書を分類すると、さらに一方向の辞書と双方向の辞書の二つに分けられる。前者は、二言語辞書の見出し項目では、一つの言語の語が他の言語の語に投射されることによって、外国語の語彙は対象とする使用者の母語の観点から解釈されているということに裏付けられている。その結果、一つの言語ペアの場合、四通りの辞書の作成が必要となる。後者の場合は、デコーディング辞書とエンコーディング辞書に必要と見なされる情報の相違はそれほど大きくないため、過半数の言語ペアにおいて四通りの辞書を作成するのはより非現実的であるということが主張される<sup>4</sup>。理論的な観点からみるならば、一方向の辞書の立場がより妥当であるとされている。本稿ではこの立場に立ち、資料の分析では日本語をデコーディングするスロベニア語話者の観点から等価性について考察する。

## 2.2 tertium comparationis と anisomorphism

異なった言語体系に属する二つの語そのものを直接比較することは不可能であるが、起点言語の語が指示することと、目標言語の語の指示することとが同等と見なされる場合、それは等価性が見られると言い換えることができる。対照言語学では、この「指示すること」を *tertium comparationis* という<sup>5</sup>。しかし、語そのものに等価性があっても、語を言語体系のネットワークの中で考えるならば、等価と見なされる語は異なった語彙体系や文法組織にかかわるため、全体的に等価性は存在しないと言われている<sup>6</sup>。このように言語において完全に一致した対応関係が見られないのは、Zgusta (1971) によれば、言語間には *anisomorphism* (非同形性) があるということに起因する。以上のようなことを前提とするならば等価性は絶対的な範疇ではないことがわかる。

## 2.3 中心的な意味と周辺の意味

辞書学では、起点言語の語と目標言語における語の等価性を確立するために、中心的な意味と周辺の意味が区別されて、両言語の語が比較された結果、相対的等価性の存在の有無が明らかになるという考え方が一般に認められる。例えば、G. Lakoff(1987)によれば、原型 (*prototype*) と呼ばれるものは、あるカテゴリーにおいて中心的な特徴であると同時に、そのカテゴリーの中の、逆に周辺の要素とは異なる認知特徴を持つとされる<sup>7</sup>。Neubert(1990)はこの Lakoff の考え方を二言語辞書に応用し、「原型」を、ある目標言語の意味素が他の目標言語の意味素への出発点としての働きをするものとして見なした。つまり、Neubert の観点に従えば、二言語辞書に取り上げられた「原型」によって、使用者は自己の内的なイメージを呼び起こし、そして、自己の内的辞書のネットワークで、手元にある文脈に語彙的、文法的、文体的または語用的なレベルにおいて、

合致する語を探すことになる。勘案すれば、この意味での原型は、認知的に概念の枠組みを提供するものということができる。したがって、原型的な訳語は、意味素の全ての意味素性や側面における使用を前提とすることはできないものの、意味素の中心的な意味に焦点を絞ることを可能にするのである。

このような見方において、さらにŠarčević(1986)の等価性のタイプについての論究が注目される<sup>8</sup>。Šarčevićは、起点言語の語が目標言語の語と同じものや概念を指示し、それぞれの言語体系で使用上機能的に同じあるいは最も付近的な役割を果たす場合には、この二つの語は「機能的等価性」を持つと指摘している。また、起点言語の語と目標言語の語とが指示する各概念について、本質的特徴(essentialia)と非本質的特徴(accidentalia)による分類を紹介している。Šarčevićによると、起点言語の語と目標言語の語との間で本質的な特徴がすべて同等であるならば、そして等価性が見られないのが少数の偶有的特徴のみならば、それらの語を指示する概念は「同一」と見なされることになる。また、本質的な特徴と少数の非本質的な特徴だけが同定され得る場合には、概念上での類似と見なされることになる。そして、本質的な特徴のごくわずかのみが同等の場合には、概念には等価性が見られないということになる<sup>9</sup>。

### 3. 等価性の連続性について

#### 3.1 連続性の範囲

以上のような議論から、先行研究では等価性には連続性があるという見方が強調されている。例えば、Snell-Hornby(1987)は、一番単純な二言語間の関係、すなわち一番近い等価性を持つ関係は、専門用語の場合に見られるのに対して、一番複雑な関係は、社会的な慣習の背景を持つ知覚や個人的評価を表す語の場合に認められるという。つまり、専門用語や具体的に静的なものを指示する語の場合、知覚や評価に基づいた表現に比べて、等価語句を探すことは問題にならない。また、等価性が見られない関係は、語が文化的に特定あるいは規定されている場合に当てはまるということになる<sup>10</sup>。

等価性が見られるのは専門用語の場合に限られる。それらには、内包的意味が存在せず、外延的意味だけが存在するため、起点言語の意味領域と目標言語の意味領域が明確である。また、国際的な基準に沿って意味領域が決定される語の場合についても同様のことがいえるであろう。ただし、上記の二種類の語には完全な等価性が見られない場合もあり、それに関する標準化は専門用語のデータベースを作成する際に行われている<sup>11</sup>。

一方、等価性のない語についてはBenson(1990)が分析を行っている。Bensonは二言語間にはいわゆる語彙的ギャップ(lexical gap)と指示的ギャップ(referential gap)が見られることを指摘している。前者は、一つの言語体系においてあるものが存在しているが語彙化されておらず、それが他の言語体系においては語彙化されているという差異を指す。後者の指示的ギャップは、あ

る言語を話す集団に存在するものや概念が、他の言語を話す集団の文化には存在しないということの意味する。

### 3.2 文脈依存性

等価性と文脈依存性は、辞書学よりも翻訳論の分野において詳しく分析されているテーマである<sup>12</sup>。翻訳の場合には、常に文脈が前提となり、等価性は語のレベルに止まらず、文章全体のレベルで分析されるが、それに対して辞書の場合には、対象となる単位はあくまで語あるいは語句となる。辞書の見出し語にするためには、その語の意味を一般化しなければならないということがある。その一般化という過程において、等価語句の文脈依存性の程度には、語によって差があると Otani (1996) は指摘している。その結果、文脈依存性が弱く、語彙の意味の明確な等価語句は探しやすく、文脈依存性の強い語の場合は逆に困難となる。

以上のことから、等価性を連続性を持つものと見なし、その一方に等価性が 100% 存在し、もう一方には等価性が存在しない両端を設定し、その中間に様々な程度の等価性を与えることができる。両端の間には部分的な等価性のある起点言語の語と目標言語の語があり、その場合において中心的な意味と周辺的な意味の区別がされ、そして起点言語の語と目標言語の語の中心的な意味が同等であるならば、等価性が確認される。そこで、等価性の範囲において、いかなるパターンが見られるのかという疑問が浮かび上がってくる。

## 4. 気象情報を例とした等価性の分析

等価性の連続性を確認するため、日本語とスロベニア語の気象情報を録画した資料から三種類の「ミニ・データベース」を作成し<sup>13</sup>、そこで用いられている語を分析の対象とした。分析の対象とした語は主に気象現象に意味的に関連する間いた語類に限定した。また、選択の基準には、使用頻度も考慮に入れた<sup>14</sup>。ロワン (2000) で分析している語の中から、本稿では次の 8 語のみを紹介する。

### 1) 気温<sup>15</sup>

- 1) 最高気温は 19 度 8 分まで上がっています。
- 2) しかし、10 日、11 日は晴れても気温が低く寒くなってきそうです。
- 3) ただ、午後になりますと、急に気温が下がってきますので、お出かけの際はお気をつけていただきたいと思います。

### temperatura<sup>16</sup>

- 4) Najnižje jutranje **temperature** bodo od 7 do 13, na Primorskem okoli 15 stopinj.

(\*朝の最低気温は 7 度から 13 度、Primorska の方では 15 度ぐらいです。)

5) **Temperatura** bo še nekoliko višja kot je bila danes.

(\*気温は今日より少し高くなるでしょう。)

6) V visokogorju bodo **temperature** ostale pod ničlo predvidoma ves teden.

(\*標高が高い方面では、(気温の)氷点下が一週間続く見込みです。)

取り上げた気象情報場面においては、「気温」と「temperatura」の意味領域には1対1の関係が認められる。つまり、両方の場合において「大気の温度」の意味が見られる。また、「気温」及び「temperatura」の意味にバリエーションが表れるということがないため、両言語におけるこの語の文脈依存性は弱いということも言えるであろう。しかし、気象情報以外の場面を考慮に入れると、「温度」もスロベニア語の「temperatura」と等価性を持つため、2対1の関係が見られるということがわかる。

### II) メートル<sup>17</sup>

7) 海上の波の高さは1メートル50センチから3メートルの見込みです。

8) また、本州の所々に雷雨があって、雲の高さは8,000メートルから10,000メートルを超える雷雨に発達しています。

9) 風の方が時折10メートルを超えるような強い風となっています。

#### meter<sup>18</sup>

10) Povprečno pade 135 litrov dežja na kvadratni meter, snega ponavadi ni veliko, največ 37 centimetrov ga je bilo leta 1966.

(\*1平方メートルあたりの平均雨量は135リットルです。雪の方は少ないですが、最高は1966年の37センチでした。)

11) Hladno bo, saj bo na 1500 metrih le okoli 8 stopinj.

(\*1500メートルでは8度ぐらい寒くなるでしょう。)

12) Meja sneženja bo na nadmorski višini okoli 900 metrov.

(\*雪は海拔の900メートルから降る見込みです。)

「メートル」と「meter」の中心的な意味は両言語で「長さの単位」を指示するというものである。したがって、周辺的な意味には差が見られるにもかかわらず<sup>19</sup>、両語の等価性の程度は高いということがいえる。

### III) 前線<sup>20</sup>

13) 低気圧や前線は東の海上に出ています。

14) 今日も梅雨前線が日本付近に停滞しています。

15) 明日になりますと、北海道や北日本には寒冷前線が近づいてくる見込みです。

## fronta<sup>21</sup>

- 16) Po nočnem prehodu hladne **fronte** se bo pri nas prehodno zjasnilo, jutri čez dan pa ponovno pooblačilo.

(\*寒冷前線が今夜抜けた後、一時的に晴れますが、日中は再び曇り空に変わってしまう。)

- 17) Sredi tedna bo naše kraje dosegla **fronta**.

(\*週の中頃には我国に前線が達する見込みです。)

- 18) Ob tej **fronti** in v severni Skandinaviji bo snežilo.

(\*この前線の付近と北スカンジナビアで雪が降るでしょう。)

気象用語としての「前線」と「fronta」には等価性が見られるといえる<sup>22</sup>。ただし、「梅雨前線」の「梅雨」にはスロベニア語でいわゆる指示的ギャップが見られる。それは、スロベニアではこの現象が存在しないということからなる<sup>23</sup>。さらに一般語としては、「前線」と「fronta」の中心的な意味合いは同一と見なし得るが、周辺の意味においては差が認められる<sup>24</sup>。

## IV) 降水<sup>25</sup>

- 19) 降水確率です。

### padavine<sup>26</sup>

- 20) Britansko otočje pa bodo že zajele **padavine**.

(\*イギリス諸島はもう降水に覆われる見込みです。)

- 21) **Padavine** se bodo zvečer od zahoda okrepile in v noči na nedeljo zajele vso državo.

(\*夜は西から降水が強くなり、日曜日の深夜にかけて全国を覆う見込みです。)

- 22) **Padavine** bodo na območju Alp ponehale, deževalo pa bo v večjem delu Italije in ob Jadranu.

(\*アルプス方面では降水は止みますが、イタリアとアドリア海ではまだ雨が降る見込みです。)

「降水」と「padavina」は、語彙の意味においては同一であるが、その使用場面においては相違が見られるため、両者の等価性は部分的であるということがわかる。つまり、日本語において「降水」は「降水確率」のような語句の中でしか使われていないが、スロベニア語では「padavina」の複数形「padavine」が特に気象情報の場面において、「雨」あるいは「雪」の代りによく使われる。スロベニア語では同じ語を繰り返し使用することは文体的によくないと見なされているため、特に気象情報のような正式な場面では、雨あるいは雪の代りに「padavine」がよく使われる。言い換えれば、「降水」と「padavina」の意味そのものには差が見られないが、使用場面において相違が生じてくるのである。

V) 陽気<sup>27</sup>

- 23) これから明後日ぐらいにかけては、朝晩は涼しい陽気が続きそうです。  
24) 北日本を除いて 20 度前後で、快適な陽気の所が多い見込みです。  
25) ただ湿気が多く、むしむしとした陽気は続きそうです。

**soparno**

- 26) Podnevi bo sončno, vroče in dopoldne **soparno**.  
(\*昼は晴れ、暑いでしょう。そして、午前中はむしむしするでしょう。)

**osvežiti se**

- 27) V sredo se bo **osvežilo**.  
(\*水曜日は涼しくなる見込みです。)

**ohladiti se, hladen**

- 28) Ohladilo se bo.  
(\*涼しくなるでしょう。)

**prijeten**

- 29) Ponedeljek bo **prijeten** septemberski dan.  
(\*月曜日は快適な 9 月日和になりそうです。)

**lep**

- 30) Nad Sredozemljem, v srednji in južni Evropi je danes prevladovalo **lepo**, sončno vreme.  
(\*地中海、中央と南ヨーロッパは今日は晴れて、いい天気でした。)

「陽気」にはスロベニア語との等価性が見られない。ただし、定義の③の意味では、「vreme (天気)」と重なる部分が見られる。とはいっても、「陽気」という語を含む文脈を、スロベニア語の類似の文と比較するならば、「陽気」はほとんど使われていないことがわかる。そのため、例えば「むしむしとした陽気」をスロベニア語で表現するならば、「soparno」が適切であり、「涼しい陽気」は「svež」「osvežiti se」になり、「肌寒い陽気」が「ohladiti se」または「hladen」に、そして「快適な陽気」は「prijeten」や「lep」と訳出できる。その際に、これらは、「陽気」の修飾語における意味が、スロベニア語では動詞あるいは副詞で表される。このことから「陽気」の文脈への依存性は高いということがいえる。

VI) 南下する<sup>28</sup>

- 31) 明日も前線は南海上に南下しています。  
32) また、上空の寒気が南下してくる見込みです。  
33) 明日の予想天気図を見ますと、前線は更に南下する見込みです。

### **pomikati se**

- 34) Njegovo središče je bilo danes nad Tirenskimi morjem in se pomika proti jugovzhodu.  
(\*その中心は今日はチレニア海にあり、南東に進んでいる見込みです。)

### **premikati se**

- 35) Nad vzhodnim Atlantikom pa je hladna fronta, ki se bo le počasi premikala naprej proti vzhodu.

(\*東太平洋にある寒冷前線はこれからゆっくり東へ移動する見込みです。)

スロベニア語では「南下」あるいは「南下する」と同じ意味を持つ語が存在しない。しかし、上記のスロベニア語の例は、日本語の「南下する」と類似する意味になると考えられる。例えば、下線部の「se pomika proti jugovzhodu」は「南東へ進む」という意味を示し、「se bo premikala proti vzhodu」は「東へと移動する」と訳される。そのため、「南下する」はスロベニア語の「pomikati se proti jugu」あるいは「premikati se proti jugu」と等価性を持つと考えられる。

## **VII) 降る<sup>29</sup>**

- 36) 沖縄では前線のそばで強い雨の降る所もありそうです。  
37) 北部の地方でも予想されていませんが、強い雨が降る見込みです。  
38) 北海道では内陸や北部を中心に、明日は平野部でも雪の降る所がありそうです。

### **deževati**

- 39) Večinoma oblačno bo, in občasno bo **deževalo**.  
(\*だいたい曇りで、一時雨の降る所もありそうです。)  
40) Danes je **deževalo** v Nemčiji, Avstriji, Švici in v severni Italiji.  
(\*今日はドイツ、オーストリア、スイス、そして北イタリアでは雨が降りました。)

### **snežiti**

- 41) Rahlo bo **snežilo** nad 900 metrov nadmorske višine.  
(\*900メートルの海拔では雪が少し降るでしょう。)  
42) V gorah bo zjutraj in del dopoldneva **snežilo**, popoldne pa bo oblačno ali megleno.  
(\*朝と午前中は山で雪が降る見込みです。午後は曇りあるいは霧が出るでしょう。)

それぞれの辞書における定義によれば、等価性を示すスロベニア語の語が存在する。具体的には「padati (落ちる)」がそれに該当する。「padati」は、①の意味では、名詞「dež (雨)」「sneg (雪)」と一緒に3人称単数の形で使われており、また②の「突然に現れる」の意味も持つ。しかし、具体的な用例を見ると、スロベニア語では「dež pada (\*雨が落ちる)」「sneg pada (\*雪が落ちる)」よりも、「deževati」「snežiti」といった動詞の方が圧倒的に使用頻度が高い。したがって、二言語辞書の項目では、「降る」に対して、「雨が降る」と「雪が降る」の二つの用例を取り



上げ、それぞれに等価性を持つスロベニア語の動詞を記述するのが、最も正確な訳出だと思われる。

### VIII) からっと<sup>30</sup>

43) そして上空には乾いた空気も流れ込んできて、明日にかけてもからっとした暑さになる所が多いでしょう。

44) そして、東京でも 27 度ですが、湿度が低くからっとした暑さになりそうです。

資料ではこの「からっとした暑さ」というパターンのみが見られた。それは「湿気がなく心地よく乾いているさま」という意味を表わしている。スロベニア語では乾いた暑さの状態を強調するため、「suha vročina」のような訳が考えられるが、スロベニアの暑さは一般に乾燥した暑さであるため、実際にそれを表現することは少ないのではないかと思われる。従って、スロベニアと日本における気候が異なること、また、スロベニア語話者の外界への感覚が日本語話者のそれと異なることから、意味そのものには大きな差が見られないものの、使用頻度には差が見られると思われる。

## 5. 気象情報の例における等価性の連続性とパラメータについて

### 5.1 等価性の連続性について

#### 5.1.1. 対称的等価性

等価性が最も高かったのは「前線」のような専門用語と「メートル」のような国際基準に沿って決定された語であった。これらの場合には、起点言語の語と目標言語の語との関係が 1 対 1 の対称性を示した。ただし、「メートル」と「meter」の場合には、気象情報には限らず、ほとんどの場合において等価性を認めることができたが、「前線」の場合に等価性が見られるのは、あくまでも気象分野の用語としてのみである。それ以外の場面では、「前線」は前述のようにスロベニア語の専門用語と異なる等価語句となるか、あるいは等価語句が全く存在しないこともある。

#### 5.1.2 非対称的等価性

同様の等価性を持つ例と見なすことのできる「降水」の場合には、日本語の語彙的意味と「padavina」の語彙的意味に差はないものの、使用レベルでは、「降水」が「降水確率」のような語句の中でのみ使われるのに対して、スロベニア語では「padavine」の複数形が特に気象情報の場面において「dež (雨)」「sneg (雪)」の代りに頻繁に用いられている。そのため、両者の等価性は部分的であり、かつ、起点言語の語と目標言語の語の関係は、非対称的であるといえる。

このような非対称的な関係には、使用レベルにおける相違以外に、収斂 (convergence)、分岐 (divergence)、レベル変更、といったパターンが認められる。まず収斂のパターンは、二つまた

はそれ以上の起点言語の語が、目標言語では一つの語と等価性を持つ場合である。このパターンに該当すると思われるのは、「気温」である。すなわち、日本語の「気温」と「温度」の二語がともにスロベニア語の「temperatura」の一語のみに該当する。

次に、分岐のパターンは、非対称的な関係に結びついており、上記の収斂とは逆のパターンとなる場合である。つまり、一つの起点言語の語が目標言語で二つかそれ以上の等価語句を持つことで、非対称的な関係が収斂とは逆の形となるパターンである。最も典型的な例としては「降る」が挙げられる。

そして、レベル変更のパターンは、上記の二つのパターンとは少し異なる非対称的な関係を示すものである。これは、起点言語の語が目標言語では語句あるいは節、もしくは文のレベルで等価性を持つことを意味する。具体的な例としては、「南下する」が挙げられる。この例は、非同形性の観点からも見逃すことができない。というのは、語のレベルで等価性がない場合でも、他のレベルでは同じ意味を示し得る単位が存在することを示しているからである。

非対称の部分的な等価性が見られるものの、先に述べた例に比べてそのオーバーラップ程度が小さいのが「陽気」である。その要因は「陽気」の語彙的意味が明確でないことから、文脈依存性の高い語と見なし得るからである。また、「からっと」という語も等価性のオーバーラップ程度の小さいものとして位置づけることができる。ただし、その場合に以下のことを指摘しておきたい。つまり、言語的レベルだけを考慮に入れるならば、スロベニア語では乾いた暑さの状態を強調するために、「suha vročina」のような訳が日本語の「からっとした暑さ」との間にはほぼ完全なオーバーラップが見られる一方で、非言語的なレベルではスロベニアの気候と日本の気候が異なることから、実際にはそのような暑さのときには、「からっと」と等価性を持つスロベニア語の語の使用頻度が低いと推定されることである。

### 5.1.3 等価性の欠如

等価性の連続性において、その末端となるのが、等価性が欠如する場合である。先行研究で指摘されていたように、それは指示的ギャップと語彙的ギャップの場合に生じる。気象情報の用例の中で、「梅雨前線」がそれに該当する。これはスロベニア語での指示的ギャップによるものである。

## 5.2 等価性におけるパラメータ

以上のように、日本語とスロベニア語の気象情報の例において、等価性が連続性する度合いが確認された。そして、そのパラメータは二つのレベルにおいて認められた。一つは非言語的なレベルであり、ある言語ペアの双方の言語を話す集団の外界における相違に基づく場合である。もう一方は言語的なレベルであり、それは非言語的なレベルでの相違の度合いに強く影響を受けてい

る。しかしながら、この言語的なレベルには特定の言語体系の要因も関係する。まず、第一に、語の具体性が考えられる。つまり、具体的なものを指示する語は、抽象的な概念を指示する語よりも、意味領域におけるオーバーラップが相対的に大きいため、等価性が高いということが考えられる。気象情報の場合では、抽象的な語よりも、具体的な語がより頻繁に使われており、そのために等価性を持つ語が相対的に多く認められた。

言語体系におけるもう一つの要因として、文脈への依存性が挙げられる。語彙的意味の明確な専門用語や国際的な基準に沿って意味領域が決定されている語は、文脈依存性が弱いため、それらの等価語句を探すことは多くの場合にそれほど困難を伴わない。一方、語彙の意味があいまいで、意味領域の不明確な語の場合には、等価性も弱まってくる。前述の資料の「陽気」がその例である。

## 6. おわりに

本稿の中心テーマは等価性および等価性の連続性であった。収集した資料の中から抽出した語を分析した結果、等価性には連続性が見られ、さらにその程度は一定ではなく、相違が見られることがわかった。つまり、等価性がある場合と、等価性がない場合との両端の間には、様々なパターンを示す部分的な等価性が存在することが確認し得た。したがって、等価性は絶対的なものではなく、相対的なものであるということがいえるだろう。つまり、等価性が確認される場合でも、それは起点言語の語と目標言語の語との関係がイコールである場合は少なく、多くの場合には、両語の中心的な意味が同等であると見なされるならば、等価性を確認することができるということである。辞書を使用者はこのように抽出される等価語句を用いて、自己の内的辞書で手元にある文脈に一致する等価語句を最終的に探し当てることとなる。つまり、二つの言語体系を一冊にまとめることは不可能であるが、使用者が等価語句を探すに当たって二言語辞書を踏み台にすることは可能となるのである。

近年、等価性の連続性に見られるパターンに関する研究はより一層必要とされることになろう。というのは、ヴァーチャル辞書において二つの検索モードが予想されるからである<sup>31</sup>。この二つの検索モードとは、一つはいわゆる等価性モード「*equivalence mode*」であり、もう一つは対照モード「*contrast mode*」である。前者の場合には、見出し語とその等価語句の重複部分に、一方後者の場合には相違部分に、それぞれ焦点が置かれている。すなわち、このように使用者は各自のニーズに合わせて、検索する語と、その等価語句との関係の見方を決定することになる。しかし、等価性モードと対照モードを決定するためには、比較する語と語の間のオーバーラップがどの程度存在するかということを理解しなければならない。等価性の連続性がいかなるパラメータによって決定されるのかについての分析をこのような事情を踏まえて、本稿では試行した。

## 注

<sup>1</sup> ランドウ(1988), p. 28.

<sup>2</sup> 本研究は日本語とスロベニア語の対照であるため、日本語では『広辞苑』(1998)、スロベニア語では *Slovar slovenskega knjižnega jezika*(1970, 1975, 1979, 1985, 1991)に沿って語レベルの単位を決定し、また語の定義もそこから引用することにする。スロベニア語における語の単位の問題については異なった意見があるが、語と語の間にスペースを入れるので、語彙の大半において、単位を容易にとらえることができる。一方、日本語ではそうではない。このことについては加藤(1998), p. 40を参照。

<sup>3</sup> Aitchison (1994), p. 50を参照。

<sup>4</sup> 一方向辞書と双方向辞書に関する詳細な議論については、本稿の基盤としているロワン (2000), pp. 8-14を参照。

<sup>5</sup> このことについては Krzeszowski (1990), pp. 15-21を参照。

<sup>6</sup> このことに関しては、「それぞれの概念の関係あるいは個々概念そのものの他との関係、全体の中の位置づけは、それぞれ同じではない」と高田(1996)は分析する。

<sup>7</sup> G. Lakoff (1987), pp. 58-67を参照。

<sup>8</sup> Šarčevićは、法律分野におけるいわゆる対照的概念分析を紹介しているが、これは法律用語の対照的な分析方法として、ベルリンの Institut für Rechts- und Verwaltungssprache で導入された方法である。Šarčević, pp. 310-311を参照。

<sup>9</sup> 等価性のタイプを示す際に、Šarčevićは数学的記号を用いる。基本的な等価性の場合、記号「=」が辞書項目で使われている。部分的な等価性を表すには「±」という記号が用いられ、また、「≐」という記号で機能的等価性の欠如が表される。

<sup>10</sup> Snell-Hornby は英語とドイツ語の例を挙げて論じている。Snell-Hornby (1987), pp. 165-66を参照。

<sup>11</sup> このことに関しては Knowles (1988)を参照。

<sup>12</sup> 例えば Nida (1975), pp. 136-149, Baker (1992)を参照。

<sup>13</sup> 分析資料のソース：日本語：NHK(日本放送協会) 19時のニュース前の気象情報番組；スロベニア語：RTV Ljubljana(スロベニアの国立放送協会) 19時 30分のニュース後の気象情報番組

分析資料の対象時期：1999年7月1日～7日、9月1日～7日、11月1日～7日の各一週間

<sup>14</sup> 基準を設定に際しては、まず、名詞、動詞、形容詞、副詞のようないわゆる開いた類の語のみを対象とした。そして、地名は対象外とした。次に、開いた語類の中で、主に気象現象に意味的に関連する語を選択した。選択のための出発点としては、国立国語研究所の分類語彙表(1964)を用いた。使用頻度に関しては、収集した日本語の資料全体において2回以上出現する語のみを対象とした。

<sup>15</sup> 広辞苑：きおん【気温】大気の温度。地表面の場所、高さ、時間によって変化する。普通、地面から約1.5メートルの高さの気温を地上気温とする。

<sup>16</sup> SSKJ: temperatura stopnja toplote // stopnja toplote zraka, merjena navadno dva metra nad površjem // stopnja toplote (živega) telesa

<sup>17</sup> 広辞苑：①長さの単位。国際単位系(SI)の基本単位。最初は赤道から北極まで大円距離の1000万分の一と定められた。1875年、国際メートル原器の二線標線の長さとして改められ、さらに1960年、クリプトン86原子から出る光の波長を基準としたが、83年からは、光が真空中で一秒の2億9979万2458分の一伝わる行路の長さとして定義されている。「米」とも書く。記号m②メーター、計量器。計器。特に、タクシーの自動料金表示器や、電気・ガスなどの自動計量器。

<sup>18</sup> meter 1. osnovna enota za merjenje dolžine 2. priprava z označenimi centimetri, decimetri, metri za merjenje, navadno dolga 1 do 2 metra 3. utežna mera, 100 kg; cent

<sup>19</sup> 具体的には、①の意味は、スロベニア語の意味ブランチ1と同等であり、また②の意味ブランチも両辞書では計量器を指示する。差が見られるのはスロベニア語の意味ブランチ3の「重さの単位」だけであるが、それは極めて周辺的な意味だと思われる。

<sup>20</sup> 広辞苑：ぜんぜん【前線】①戦場で、敵と直接に接触する最前列。また、闘争や運動の先頭。第一線。②(気)前線面と地表面との交線。また前線面を含めて前線と呼ぶこともあり、気象変化に重要な役割を果たす。③海洋などで、性質の異なった二つの水塊が接触する場所。④地図上に、ある現象の生ずる地点を結んだ線。

<sup>21</sup> SSKJ: fronta 1. področje, kjer se spopadeta dve vojski 2. skupnost strank ali posameznikov, ki imajo isti cilj 3. drug poleg drugega stojeci predmeti ali objekti 4. prednja stran (stavbe), pročelje 5. mejno področje med zračnima gmotama, ki se razlikujeta zlasti po temperaturi, vlagi, oblačnosti

<sup>22</sup> 気象用語としての「前線」と「fronta」の意味領域は気象用語辞典においても、同じように定義される。それは『気候学・気象学辞典』(1985)の定義「温帯低気圧の後半部に現れ、暖気を押しつけて寒気にかわる運動があ

る前線をいう」からわかる。また『Meteorološki terminološki slovar』(1990)における定義「atmosferska fronta, meja med različnimi zračnimi masama in dogajanje ob njej」からも理解される。そして、気象専門用語の「寒冷前線」はスロベニア語の「hladna fronta」と等価性を持つ。

<sup>23</sup> 「梅雨前線」をスロベニア語に訳すならば「*baiu fronta*」という外来語を導入するのが最も適切であると思われる。また、「*vremenska fronta, ki se junija in v prvi polovici julija pomika od juga na sever Japonske, deževna doba*」のような百科事典的な説明も加えなければならないと考える。

<sup>24</sup> 具体的には、広辞苑とSSKJの定義を比較すると、日本語で①の意味ブランチはスロベニア語での意味ブランチ1と2に当たるといことがわかる。そして、②の意味ブランチがスロベニア語での意味ブランチ5に当たる。また、広辞苑の③と④の意味ブランチはスロベニア語にはない。一方、SSKJの意味ブランチ3(列に並んでいるもの)と4(正面、*古文体*)は日本語には見られない。

<sup>25</sup> 広辞苑：こうすい〔降水〕地上へ降下した水。

<sup>26</sup> SSKJ: *padavina voda v tekočem ali trdnem stanju, ki pada iz oblakov*

<sup>27</sup> 広辞苑：ようき〔陽気〕①陽の気。万物が動き、または生じようとする気。②心がはればれしいこと。ほがらかなこと。気分がうきうきすること。③時候。季節。

<sup>28</sup> 広辞苑：なんか〔南下〕南の方へ進むこと。

<sup>29</sup> 広辞苑：ふる〔降る〕①空から雨・雪などが落ちる。また、涙が落ちる。霜が置くことにもいう。②(多く「一・って湧く」の形で)突然に現れる。思いがけず生ずる。

<sup>30</sup> 広辞苑：からっと(副)①湿気がなく心地よく乾いているさま。②明るく広々としたさま。③こだわりがなく、明るく気持ちよいさま。④ある状態が、急にまたはすっかり変えるさま。からっと。

<sup>31</sup> このことについてはAtkins(1996)を参照。Atkinsは、将来的には使用者自身が自己の要求にあわせてコンピュータの構造を決定し、同時に一言語辞書と二言語辞書、またそれ以外の参考資料にアクセスすることができるようになることを予想している。そこでは二言語辞書の項目は、両言語体系のリンクになるため、辞書項目で取り上げられた等価語句を正確に表現することが重要になり、また各項目別の用例においても、その語を典型的なパターンで説明することが要求される。

## 参考文献

- Aitchison, J. (1994) *Words in the Mind. An introduction to the Mental Lexicon*, 2<sup>nd</sup> ed., Oxford: Blackwell.
- Atkins, B. T. S. (1996) Bilingual dictionaries. Past, present and future. *Euralex '96 Proceedings*, II, eds. M. Gellerstam et al. Göteborg: Göteborg University, pp. 515-546.
- Baker, M. (1992) *In Other Words*, London: Routledge.
- Benson, M. (1990) Culture specific items in bilingual dictionaries of English, *Dictionaries*, 12, Dictionary Society of North America, pp. 43-54.
- Cruse, A. (2000) *Meaning in Language*, Oxford: Oxford University Press.
- Knowles, F. E. (1988) Lexicography and terminography: A rapprochement?, *Zürilex '86 Proceedings*, ed. M. Snell-Hornby, Zürich: Francke Verlag, pp. 329-337.
- Krzyszowski, T. P. (1990) *Contrasting Languages: The Scope of Contrastive Linguistics*, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Neubert, A. (1990) Fact and fiction of the bilingual dictionary, *Euralex '90 Proceedings*, ed. M. Alvar Ezquerro, Barcelona: Biblograf, pp. 29-42.
- Nida, E. A. (1975) *Exploring Semantic Structures*, München: Wilhelm Fink Verlag.

- Otani, Y. (1996) Cross language equivalence: between lexical and translation equivalents in the case of English-Japanese dictionaries, *Euralex '96 Proceedings*, II, eds. M. Gellerstam et al. Göteborg: Göteborg University, pp. 609-614.
- Sinclair, J. M. (1998) The lexical item, *Contrastive Lexical Semantics*, ed. E. Weigand, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Snell-Hornby, M. (1987) Towards a learner's bilingual dictionary, *The Dictionary and the Language Learner*, Tübingen: Max Niemeyer, pp. 159-170.
- Šarčević, S. (1986) The challenge of legal lexicography: Implications for bilingual and multilingual dictionaries, *Zürilex '86 Proceedings*, ed. M. Snell-Hornby, Zürich: Francke Verlag, pp. 307-314.
- Zgusta, L. (1971) *Manual of Lexicography*, The Hague: Mouton
- 加藤安彦 (1998) 「事典とコーパス」『日本語学』Vol. 17, pp. 37-44.
- 斎藤敏雄、中村純作、赤野一郎 (1998) 『英語コーパス言語学』研究社出版
- 高田誠 (1996) 「対照研究の方法」『日本語学』Vol. 15, pp. 126-131.
- ランドウ、シドニー I、訳小島義郎・増田秀夫・高野嘉明 (1988) 『辞書学のすべて』研究者出版
- ロワン、B. (2000) 『三言語辞書における等価性について』筑波大学大学院修士課程地域研究研究科  
修士論文

#### 参考辞書、手引き

- Slovar slovenskega knjižnega jezika (1970) Prva knjiga A-H, (1975) Druga knjiga I-Na, (1979) Tretja knjiga Ne-Pren, (1985) Četrta knjiga Preo-Š, eds. A. Bajec et al., Ljubljana: Državna založba Slovenije.
- Slovar slovenskega knjižnega jezika (1991) Peta knjiga T-Ž in Dodatki A-Š, eds. I. Černelič et al., Ljubljana: Državna založba Slovenije.
- Meteorološki terminološki slovar (1990) ed. Z. Petkovšek, Ljubljana: Slovenska akademija znanosti in umetnosti.
- 新村出編(1998)『広辞苑』第五版、岩波書店
- 新田尚 (1996) 『天気予報用語集』東京堂出版
- 吉野正敏他 (1985) 『気候学・気象学辞典』三宮書店
- NHK 放送文化研究所 (1996) 『NHK 気象ハンドブック』日本放送出版協会
- 国立国語研究所 (1964) 『分類語彙表』国立研究所資料集 6、秀英出版